

## spyi (類) と bye-brag (種) について

小野田俊蔵

前稿『ldog-chos について』(印仏研, 29 卷1号, pp. 385-382) の註19)を補正するために、本稿では ldog-chos phuñ-sum tsam-po-pa (絶対抽象概念) の例として頻用される“spyi (類)”と“bye-brag (種)”の概念について若干の吟味を加えてみたい。

“spyi dan bye-brag”はすでにドゥラ書の祖型とされるチャパ作のドゥラに独立した章目として扱われていたらしく<sup>1)</sup>、各種の後世のドゥラ書でも“rgyu dan ’bras-bu”や“rdzas-chos ldog-chos”あるいは“’brel-ba dan ’gal-ba”等と並んで、チベット僧院で初学者が学ぶべき最も基礎的な概念の一つとして数えられているものである<sup>2)</sup>。

“spyi”は普通“rigs-spyi”, “don-spyi”, “tshogs-spyi”の三種<sup>3)</sup>あるいは“sgra-spyi”を加えた四種<sup>4)</sup>に分類されるが、これらの中、“tshogs-spyi”は例えば「木々の集まりとしての森」のように物理的な集合体を意味し、また“don-spyi”および“sgra-spyi”はそれぞれ概念や言語表現の対象と考えられる共相 (spyi-mtshan, sāmānyalakṣaṇa) を意味している<sup>5)</sup>。すなわち、“rigs-spyi”以外のこれら三種はそれ自体の成り立ちの上で“spyi”としての要素が見い出されるというのみであって、対応する「種」を予想した上での相対的な「類」なる概念を意味するものではない。

“rigs-spyi”は『ヨンジン・ドゥラ』によれば“rañ gi rigs can du ma la rjes su ’gro ba’i chos<sup>6)</sup> (自己と同族のものが複数で随伴するところの存在)”と定義され、またツォンカパによる定義では「種」の立場から“chos de khyod yin, de khyod dan bdag gcig tu ’brel, de ma yin zin khyod yin pa du ma grub pa<sup>7)</sup> (或る[特定のその種となる]存在が[類たる]そのものとしての要素を持ち<sup>8)</sup>、そ[の特定の種たる存在]がそのものと同質の関係にあり、そ[の特定の種たる存在]以外にそのものである[という存在]が多数想定しうる<sup>9)</sup>もの)”とされる。これに対し“bye-brag (種)”は『ヨンジン・ドゥラ』では“khyab byed du ’jug pa’i rañ gi rigs yod pa can gi chos<sup>10)</sup> (遍充することになる自己の「族」をもつ存在)”と定義され、ツォンカパによれば、その「類」を予想した上で“khyod chos de yin, chos de la

bdag gcig tu 'brel, khyod ma yin źiñ chos de yin pa du ma grub pa<sup>11)</sup> (それが〔その類たる〕或る〔特定の〕存在としての要素を持ち、その〔類たる特定の〕存在と同質の関係にあり、そのもの以外にその〔類たる特定の〕存在である〔という存在〕が多数想定しうるもの”と定義される<sup>12)</sup>。このツォンカパの定義からも分かるように、「種」と「類」はあくまで相対的な概念であって、問答の上で使われる一部の例外(後述)をのぞいて、ひとつの存在が或るものの種であると同時に別の或るものの類であるということが普通である。ツォンカパの紹介する上記の定義方法は『ヨンジン・ドゥラ』等の後世のドゥラ書に於ても“bye-brag gi 'gro-tshul (種であることの確認方法)”として継承されている<sup>13)</sup>。表現上の煩雑さを避けるために「桜」と「木」を使ってこの確認方法を吟味してみよう。

桜が木の種であり、木が桜の類であるための第一の必要条件是「桜は木である」と言えること、すなわち、桜が木としての要素を持っていることである。

第二の条件は、桜が木と同質の関係にあることである。「同質の関係」とここで訳したのは“bdag gcig 'brel”なる術語で、これは“khyod chos de dañ bdag ñid gcig pa'i sgo nas tha dad [gañ źig] chos de med na khyod med dgos pa'i chos<sup>14)</sup> (それが或る特定の存在と同一の本質を持つものでありつつ別の存在であり、〔かつ、〕その〔特定の〕存在がもし存在しなければ必然的にそのもの自身が存在しないようになるようなもの)”と定義される関係である。つまり、「桜」という木を概念把握することは「木」なる概念をぬきにしては成立しない、という関係をもつ。

第三の条件は、桜以外に木であるものが多数想定しうることである。すなわち、桜以外で木である、例えば「松」や「梅」の存在が指摘されなければならない。

種であるためのこの三つの条件は、「桜」や「木」などの具象概念のみでなく、「類」や「種」などという抽象概念間で「類」や「種」の関係を考える場合でも確認方法とされる。以下に前稿からの課題、すなわち、「壺の類」が絶対抽象概念とされることの理由を考えてみよう。

「壺の類」が絶対抽象概念であるための二つの条件、(イ) 壺の類が壺の類でないこと、(ロ) 壺の類でないものが壺の類であること、を順次確認すると、

一般に、AがBの類であるということは、BがAの種であるということと等価である。従って、壺の類がそれ自身すなわち壺の類であるかどうかは、壺が「壺の類」の種であるかどうかを吟味すればよいことになる。壺が「壺の類」の種であるためには、種であるための第一の条件に照らして、壺は「壺の類」でなければならないが、そうではない。なぜなら、壺が「壺の類」であるということは壺

が壺の種であることと等価であり、そのためには、種であるための第三の条件に照らして、壺以外に壺であるものが存在せねばならなくなるのである。

次に、壺の類でないものが壺の類であるかどうかは、同じく、壺が「壺の類でないもの」の種であるかどうかを吟味すればよい。種であるための第一の条件は満たしている。すなわち、壺が「壺の類でないもの」としての要素を持っていることは前述したとおりである。次に第二の条件も満たしている。「壺の類でないもの」という概念を把握することは、必然的に「壺」という概念を確認することになってしまっているからである。最後に第三の条件を満たすための例としては、「火」「煙」等を考えればよい。これらは壺以外の存在であり、「壺の類でないもの」である。以上三つの条件を満たしていることから、壺は「壺の類でないもの」の種であると確認され、壺の類でないものは壺の類であるとされる。

このように、「壺の類」は肯定的にも否定的にも述語不可能な概念であると考えられ、「絶対抽象概念」の例とされるのである。

チベット僧院の中で交される「類と種」に関する問答の中には他にも興味深いものが数多くある。例えば、「類の類 (spyi'i spyi)」と「種の種 (bye-brag gi bye-brag)」とが四層交叉 (mu-bzi) であることを証明させる問答<sup>15)</sup>などは、「類」や「種」の概念があくまで相対的な概念であることを理解させるためにきわめて有効な問答であると言えよう。また、元をひとつも持たない「空集合」の如き概念が問答に取り入れられる場合もある。これは“bye-brag kho na (種 [として] のみ [の存在])”と呼ばれ、“ka bum gñis (柱と壺の兩者)”のような“yin pa mi srid pa'i śes bya (あり得ない存在)”<sup>16)</sup>がこれであるとされる。すなわち、それであると言えないものがないのであるから、種であるための第一の条件を満たす自らの種が存在せず、自らは類とはなり得ない、とされるのである。

1) Kloñ rdol bla ma ñag dbañ blo bzañ, *Tshad ma rnam 'grel sogs gtan tshigs rig pa las byuñ ba'i min gi grañs*. (Tohoku No. 6545), 2b2. (Śatapiṭaka Vol. 100, p. 663)

2) 『オンジン・ドゥラ』Yoñs 'dzin rdo rje 'chañ, *Tshad ma'i gzuñ don 'byed pa'i bsdus grwa'i rnam b'zag rigs lam 'phrul gyi lde mig*. (Tohoku No. 6857) (以下 Y-DG), 初級本 (chuñ-nu) 第六章 (タシジ ヨン版 18b5-22a3) に “spyi dañ bye-brag gi rnam-b'zag” がある。

3) Y-DG, 21a1.

4) Tsoñ kha pa blo bzañ grags pa'i dpal, *sDe bdun la 'jug pa'i sgo don gñer yid kyi mun sel*. (Tohoku No. 5416), Varanasi, 1972, (以下 Ts-YM) p. 34; Geshé

(130) spyi (類) と bye-brag (種) について (小野田)

Ngawang Nyima, *bsdus grwa brjed tho* (Memoranda on Logic), Leiden, 1970, (以下 *N-DG*) p. 36.

- 5) それぞれの代表的な定義は以下のとおり,

“tshogs-spyi” の定義 “rañ gi cha śes du ma ’dus pa’i gzugs rags pa” (*Y-DG*, 21a3); “ya gyal du ma tshogs pa” (*Ts-YM*, p. 35; *N-DG*, p. 36).

“don-spyi” の定義 “rtog pa la chos de’i don du snañ ba gañ žig, dños po ma yin pa” (*Ts-YM*, p. 35; *N-DG*, p. 36).

“sgra-spyi” の定義 “rtog pa la miñ du snañ ba gañ žig, dños po ma yin pa” (*Ts-YM*, p. 35; *N-DG*, p. 37).

- 6) *Y-DG*, 21a1.

- 7) *Ts-YM*, p. 34.

- 8) 同一定義上で主語が異なることによって起る混乱を避けるために「A が B である」という文章を訳文では「A は B としての要素を持つ」と言いかえる。以下同じ。

- 9) “grub” を “tshad mas grub” と理解し、訳文では「想定しうる」と訳す。以下同じ。

- 10) *Y-DG*, 21a5.

- 11) *Ts-YM*, p. 34.

- 12) Go ram bsod nams señ ge, *Tshad ma rigs pa’i gter gyi dka’ ba’i gnas rnam par bsad pa sde bdun rab gsal*, サキヤ派全書, Tokyo, 1968, Vol. 12, No. 41, p. 21 に、或る人 (kha-cig) の説として “rañ gi bye brag du ma grub” を “spyi” の定義とし、“khyod chos de yin, khyod chos de la bdag gcig tu ’brel, khyod ma yin ciñ chos de yin pa du ma grub pa” を “bye-brag” の定義とするという意見が紹介され、それを著者の Go-ram-pa が自己矛盾であると批判している。つまり、“du ma” とは二つ以上のことであるとし、“spyi” の定義によると二つだけの種を持つ類も “spyi” であると認められるが、“bye-brag” の定義によると種は少なくとも三つ必要であると理解される、と Go-ram-pa は批判するのである。これはツォンカパが “spyi” の定義を “du ma la rjes ’gro byed pa” (*Ts-YM*, p. 34) としていることへの批判ともとれる。ちなみに後世のドゥラ書では “spyi” 自体の定義は “rañ gi gsal ba la rjes su ’gro ba’i chos” (*Y-DG*, 20b6) とされこの問題は一応回避されている。

- 13) *Y-DG*, 19a1, etc..

- 14) *Y-DG*, 中級本 (’brin), 5b2. あるいは次のように定義されることもある, “khyod chos de’i khyab bya gañ žig, chos de las don gžan ma yin pa” (*Ts-YM*, p. 32; *N-DG*, p. 36)

- 15) *Y-DG*, 19b6.

- 16) 拙稿『問答 (rtsod-pa) における “khyod” の機能について』日本西藏学会々報, 第 25 号の註(6)を参照されたい。

(仏数大学助手)